

# 地域調査とGIS

地域調査士とGIS学術士のためのニューズレター

14号

2023年3月

(公社) 日本地理学会  
資格専門委員会



## 委員紹介

2022～2023年度

(五十音順・委員長★ 副委員長☆)

## 巻頭言

資格専門委員会委員長 島津 弘 (立正大・専門地域調査士)

### 資格専門委員会委員

石原 肇 (近畿大)  
岩動志乃夫 (東北学院大)  
今里悟之 (名古屋大)  
宇津川喬子 (法政大)  
黒木貴一 (関西大)  
小原文明 (法政大) ☆  
佐々木明彦 (国士館大)  
芝田篤紀 (奈良大)  
島津 弘 (立正大) ★  
鈴木重雄 (駒澤大)  
高田明典 (日本地図センター)  
竹澤史也 (日本地図センター)  
田中耕市 (茨城大)  
中岡裕章 (日本大)  
南 春英 (松蔭大)  
仁平尊明 (東京都立大)  
花岡和聖 (立命館大)  
深瀬浩三 (立正大)  
森本健弘 (筑波大) ☆

### 地域調査士認定委員会委員

池 俊介 (早稲田大)  
菊地俊夫 (東京都立大・名誉) ★  
中井達郎 (国士館大)  
野間晴雄 (関西大)  
長谷川均 (国士館大)

### GIS学術士認定委員会委員

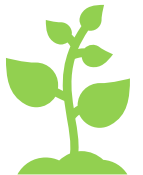
宇根 寛  
(日本地図センター) ★  
熊木洋太 (専修大)  
鈴木厚志 (立正大)  
塚田野野子  
(株)東京地図研究社)  
村山祐司 (筑波大・名誉)

新型コロナウイルスの影響により、現地における地域調査がやりにくい期間が長く続きました。そのなかにおいても感染症対策を行った上での調査やオンラインインタビューなど新たな方法を用いた地域調査などさまざまな工夫をして地域調査を行ってきたのではないのでしょうか。新型コロナウイルスの影響が徐々に小さくなるこれからは、従来の方法に加えたこの期間に工夫された方法も加えて地域調査がより発展していくことを期待します。一方で近年、公のデータ取得の中止の問題が起こっています。気象庁による生物季節観測の大幅な縮小や農林水産省による農業集落調査に関する問題などです。これらは、地域の自然や地域の実態を明らかにするため、また変化を知るための重要なデータです。地域調査を行う我々としても、これらのデータの継続の必要性について、常に注意を払う必要もあるでしょう。

これまでよりも3倍になった地上分解能、災害時などのさまざまな観測モードや高分解能画像のアーカイブなどが期待された地球観測衛星「だいち3号 (ALOS-3)」が搭載されたH3ロケットの打ち上げが残念ながら失敗しました。不透明になったとは言え、今後打ち上げられるだろう「だいち4号 (ALOS-4)」も含めて、取得されるさまざまなデータは、GISを用いた研究・分析にさらなる発展をもたらすことは間違いのないでしょう。

ここ数年の間にも既存の地理的データのオープンデータ化が推進され、さまざまなデータがインターネット上で取得することができるようになったこともGIS研究を後押ししていることと思います。

地域調査士およびGIS学術士の皆さんには、社会のこのような流れの中で活躍していただけることを願っております。資格専門委員会ではさらなる人材養成を支援していきます。これからもよろしくお願いいたします。



## 地域調査／GIS分析の現場

### 地域調査で知恵を学ぶ

桐越仁美 (国士館大・専門地域調査士)

私が現在のフィールドである西アフリカに通うようになったのは、2010年8月のことである。2010年3月に首都大学東京（現東京都立大学）の地理環境コースを卒業した私は、そのまま同大学の大学院に進学した。修士1年生の時に初めてニジェール共和国に渡航し、その後、京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科の博士課程に進学した後はニジェール共和国とガーナ共和国の2か国をフィールドとした。学生のうちは農村に数か月間滞在し、住み込みで調査を実施した。京都大学で博士（地域研究）の学位を取得した後は、東京外国語大学での研究員の期間を経て、国士館大学の講師となり現在に至っている。渡航できない年もあるが、基本的には年に一度のペースで現在もニジェールやガーナに行っている。いずれの地域でも、現地住民とともに長い時間を過ごし、多くを語り合うことで、彼らが長年にわたり築き上げてきた知恵を学んできた。彼らの知恵には、私たち日本人が抱えるさまざまな課題にも応用できるのではないかと感じさせるものが多い。➡

## ニジェールにおける調査研究

ニジェールにおける調査は2010年から2013年まで集中的におこなった。当時のテーマは、サヘル地域の砂漠化の進行と在来の砂漠化防止策の実情を把握するというものであった。調査村周辺2km四方の毎木調査を実施し、村人に協力してもらって約7000本の樹木を調査した。調査中に樹木の名称や特徴、利用方法などを教えてもらうなかで、樹木の形状がカギを握っていることに気がついた。

この地域は砂漠化の進行が著しく、支援団体による植林活動なども続けられている地域であったが、厳しい環境のために植林した樹木が根付かず枯れてしまう場合がほとんどである。一方、現地住民は自然に生えてきた樹木を管理することによって多様に利用している。砂漠化が進行する場所では地面を茂みで覆う低木をそのまま残すことで飛砂の堆積を促し、そうでない場所では葉や実が利用できる有用樹のみを残し、丁寧に下方の枝を落とす。枝を落とさずに生長させても良いように思うが、地面に接する茂みをなくすことで食害を引き起こすサバクバッタの繁殖を防げるのだという。「植える」のではなく、そこにあるものを「活かす」という彼らの知恵である。



毎木調査の様子

## ガーナにおける調査研究



嗜好品のコーラとコーラ商人たち

2013年の末に西アフリカにおけるテロ活動が活発化したことでニジェールでの調査継続が難しくなったため、2014年からはガーナで調査を開始した。ガーナでは、ガーナで生産されニジェールで消費される嗜好品コーラ（*Cola nitida*）の商人ネットワークを調査している。「コーラはガーナとニジェールを繋ぐ作物である」という認識から始めた本調査であったが、そこから明らかになったのは、商人のあいだに築かれた信用であった。

コーラ交易は古くからみられ、ガーナとニジェールのあいだの交易が発展したのは18世紀頃とされる。生鮮品であるコーラの輸送は迅速におこなわれなければならないために、商品の受け渡しを優先し、代金の支払いを後回しにする掛け売りの手法がとられる。掛け売りは商人間の信用を基盤として成立するが、西アフリカの多彩な交易のなかで掛け売りが実施されているのは、コーラ交易を含むごくわずかの取引に限られる。西アフリカでは「コーラの取引を公正におこなえる商人は信用に値する」という認識が広く共有されており、取引以外のシーンでも度々持ち出される。迅速な輸送を実現させるための知恵は、人びとの信用形成に応用されている。



## 専門地域調査士の皆さまへ

「専門地域調査士」の有効期限は10年です

資格を取得して10年目に、資格の更新手続きをお願いしております。期限までに更新手続きを行われないと、資格は失効します。

更新手続きの際は、この10年間に、

- ①地域調査に関する活動実績（実務経験や教育研究歴）
- ②地域調査に関する発表や報告等（大会や集会などでの2回以上の発表や報告）
- ③地域調査に関する論文や報告等の執筆  
（地域調査の社会的普及に資すると判断される書誌も含む）
- ④更新講習会の受講（年1回の実施）

のいずれかを行っていることを報告いただきます。

更新手続きは期限の6ヶ月前から行なうことができます。

資格専門委員会のホームページより「専門地域調査士更新申請書類（10年更新）」をダウンロードいただき、ご記入と更新申請料を振り込みのうえ、期限直前の認定委員会の開催日より前に資格専門委員会までご郵送ください。

こちらからも





## 学生時代と社会人における地域調査とGIS分析

秋葉 健太（株式会社パスコ・地域調査士・GIS学術士）

私は2020年に立正大学地球環境科学部地理学科を卒業し、現在の職場である株式会社パスコに勤務している。現在は主に航空レーザ測量の業務を担当している。「航空レーザ測量」は、飛行機やヘリコプターに搭載したレーザ測距装置から地上にレーザ光を照射することで、地上の三次元データ（X、Y、Z）を取得する技術である。地上から反射するレーザ光との時間差により得られる地上までの距離と、GNSS測量機やIMU（慣性計測装置）から得られる航空機の位置情報から、

地上の標高や地形の形状を把握することができる。航空レーザ測量によって得られたデータは、「森林」や「砂防」、「河川」などといった多岐にわたる分野で、利活用されている。近年では、森林経営の取り組みが活発になっていることや、河川の維持管理での調査として航空レーザ測量が使用されている。そのため、私の仕事が多くの場合で活かされており、非常にやりがいをもって業務に取り組んでいる。

**学生時代には「地理学」**を学び、主に「自然地理学」や「地理情報科学」の分野について研究した。卒業研究では「北アルプスにおける山容の形成とその地形・地質条件」というテーマであったが、様々な山の形が見られる北アルプスの山岳地域において、異なる地形や地質ごとによってどのような山の形が形成されていくのかといったことを、「地域調査」や「GIS」を活用して研究を行った。実際に自分の足で山を登り、自分の目で山の斜面を観察した。さらにGISを活用することで、特定の地質や地形の存在が、山が緩やかになるのか、あるいは急になるのかなど、どのような形

が生まれるのかといったことを、調べることができた。

学生時代に培った地域調査やGISの知識・技術を活用できる業務に従事できる会社に就職したいと思い、現在の会社に就職した。当社は、ドローンにグリーンレーザスキャナを搭載して、ピンポイントでの水底の地形形状を計測できるなど、新技術の開発に積極的に取り組んでいると思った。私が学生時代までに学んだことと最先端の技術を組み合わせながら、様々な業務に地域調査やGISを交えながら社会に貢献できるだろうと感じた。

私は、2023年4月で入社4年目を迎えるが、これまで一貫して**航空レーザ測量の業務**に従事している。本業務は航空機での計測以外はほとんど室内での作業となることが多い。私は計測したデータを編集・処理し、標高データを作成することが主であるため、机上作業がほとんどである。しかし、ALB業務の際は、計測時に合わせて現場へ出張することが多い。「ALB（航空レーザ測深）」は、通常のレーザ光（近赤外レーザ）だけではなく、緑色（グリーン）レーザも照射して計測する。緑色のレーザは水中を透過することができるため、河床や海底の三次元計測データを取得することができる。しかし、ALB計測は降雨や河川改修などによって、水が茶色などに濁っていないことや、波浪や白波がないことが条件である。水が濁っていると、レーザ光が河床や海底までに届きにくくなるため、ALB計測をしても地形データが取得できないことがある。そのため、ALB計測を行う際は河川や海岸の水質の状況を把握する必要があり、同時期に「水質調査」を実施している。

**河川や海岸での水質調査**では、調査に必要な機材をロープにつなぎ、橋や船舶から機材を水面へ投入して水質データを取得している。そこで、透明度や透視度、濁度などを測定することになる。いずれも、ALBによる取得データからではわからない情報を現地に赴いて調べてくるため、非常に責任のある仕事である。学生時代に自然環境の調査の方法や、データの取りまとめに関する実習を受けたが、学生時代に学んだ自然環境



船舶から海水の透明度を調査している様子

などの地域の調査について、実際の業務でも実践することができ非常にやりがいを感じている。

私は航空レーザ測量の業務に携わっており、学生時代に地理学を学んで得られた知識やスキルを活用できている場面が非常に多い。なかでも、**地域調査やGISのスキルは、自然環境のような地域の見えにくい部分を調べたり、分析したりするのに非常に役に立つものである**。今回の水質調査も、航空機を使った測量だけではわからない情報を得ることができるほか、業務を最後まで遂行させるために欠かせない仕事である。地域調査のスキルを身に付けておくことで、社会人になってからも、お仕事で何かの助けになってくれることは間違いないと考える。地理学に興味をもっていただいた方には、ぜひ地域調査やGISについても深く学んでいただければと思う。地域を調べたり分析したりする力が、今後の将来のお仕事や事業の助けとなると信じている。

## 地域調査の手法としての“ミステリー”

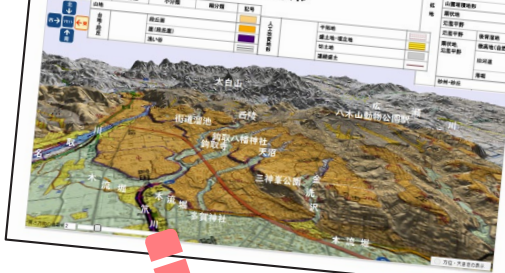
山内 洋美（宮城県仙台西高等学校）

地方教育大出身の一高校教師である筆者が、かつて恩師に仕込まれた「地域調査」の面白さをどう高校現場で生かそうとしてきたか。いくつかの実践の中から、イギリス地理教育発祥の学習手法“ミステリー”を用いた地域調査単元の教材研究と授業について紹介したい。

学習手法“ミステリー”とは、発問（ここでは謎と呼ぶ）に対して、情報が載った複数のカードを相互に関連付けてストーリーをつくり、謎に対する答えを考えるというものである。学習手法であるので、どの単元でも用いることは可能だが、地域調査単元で用いるときは、対象地域に対する現地調査および文献調査の内容や、また生徒の地域認識や疑問から謎を立て、情報カードを作成し“ミステリー”ストーリーを組み立てていく。試行錯誤の繰り返しで手間は相当かかるが、土地勘のない地域への転勤が当たり前の公務員教師にとって、赴任した地域をさまざまな視点から見知るのにはもってこいだ。

3年前の春、仙台市・八木山の外れにぼつんと建つ開校38年目の現任校への転勤直後に、コロナ禍で2か月休校を強いられた。生徒のいない職場を飛び出し、鶯啼き山野草溢れる裏山や学校周辺を散策しながら、このご時世でできないだろうフィールドワークの代わりとして「なぜ、ここに学校ができたのか」という謎を解く“ミステリー”を作ってみようと考えた。学校図書館の書庫には、現任校の敷地に在った県農業短期大学農場の資料があり、古代から中世の遺跡があったことや、その後萱場（入会地）として維持されていたこと、果樹園や田畑となる校地を、人力で何年もかけて整地したことなどがわかった。また開校時からの学校要覧の蓄積からはおよそその通学圏やその変化、またその時々学校の様子も知ることができた。それらの資料から得られた情報を、地理院地図や空中写真、今昔マップと重ねてその分布や変化を観たり、また古い写真を探して景観や土地利用の変化を探ったりしながら、経済・社会・環境の3観点で整理して、カードの内容とストーリーを考えた。

## 14 西陵周辺の地形



## 4 あすと長町

ユキノは、小学校に入る年に福島市から長町に越えてきて、母と弟とともに、あすと長町の仮設住宅に入居した。原発事故から自主避難したのだ。もともとJR貨物駅跡の再開発が予定されていた長町駅の東側は、震災後に一面、仮設住宅で埋められ、復興とともに再開発が進んだ。

今では、IKEAやtekuteながまちもあるし、東北本線も高架になったので長町旧市街との行き来も楽になったし、本当に便利になった。それで、ユキノたちは、福島に戻らずに、あすと長町に建てられた災害公営住宅に入居した。もうすぐ、KHB東日本放送も移ってくるらしい。

父は、今福島市で、中華料理店を切り盛りしている。名物の円盤餃子が自慢だ。コロナ禍でなかなか県外に行けないから、ユキノはおそろ。父の円盤餃子を無性に食べたくなる。お父さん、tekute!に出店すればいいのにな。テナント空いてるよ…。

## ービッグピクチャーのイメージー

## ストーリー&lt;B&gt; ベーブ・ルースがきた

サヤコは、幼いころ、亡くなった祖父からベーブ・ルースの話を聞いたことがある。

…オレがちっちゃいころよ、八木山動物公園は、野球場だよ。

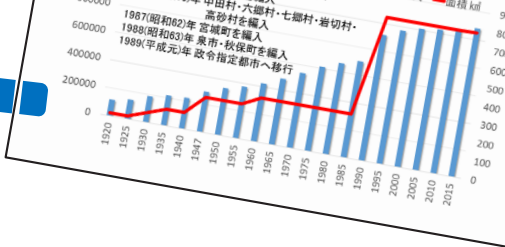
街中さ、“紅久”って江戸時代からの店あって、そこの八木久兵衛さんて人、もともと越路山と呼ばれてたこの辺り買って、八木山と名付けたんだ。んで、野球場や遊園地作って、あと、竜の口溪谷さ八木山橋かけで、県さ寄付したんだ。その頃のお金で、6、70万円かかったけど。

昭和9年だったかな、その野球場さ、大リーグのベーブ・ルース来たのは。日本のチームと試合して、いきなりホームラン打ったんだっや。いやあ、おどげでねえことよ。

## ▲ “ミステリー” ストーリーカード

さて、2か月遅れで入学してきた生徒たちは、3年間の間に最大3回、その地域調査“ミステリー”を体験した。グループで話し合いながら、カード同士の因果関係の組み合わせでできるビッグピクチャーを何度も組み換え、読み解き、地域でよりよく暮らすために何が必要かを考えた。そのうち、不便な山など削って平らにすればよい、交通が不便なら自治体や企業に頼んで新しい道路をつくったりバスの本数を増やしたり、いやもっと便利なところに学校を移せばよいなどと簡単に考えていた生徒の意識が、その地域の特徴をどう生かすかといった方向へ変化していった。そして、地理の授業での研究テーマに居住地の地域研究を選び、日本地理学会高校生ポスターセッションで発表した者も現れた。

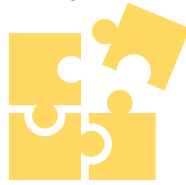
## 1 仙台市の人口推移(大正9～平成27年)



## ▲情報カードたち



冬を目前にしたいま、裏山に十数年凍結されていた宅地造成工事が入った。親しんだ自然景観が日を追って失われていく様子を見ながら、現任校周辺の地域のありようを改めて考えるという、3年前には想像もしていなかった二度とできない授業に取り組む羽目になった。それも生かしつつ、この地域調査 “ミステリー” の内容を更新していこうと思っている。



山内洋美。2021。ミステリー「黒い津波とリアス海岸」による自然環境と防災の授業、地理教育システムアプローチ研究会編『システム思考で地理を学ぶー持続可能な社会づくりのための授業プラン』古今書院、85-93。

山本隆太。2021。地理教育手法の国際的な伝播ーイギリス発オランダ／ドイツ経由の「ミステリー」ー。志村喬編著『社会科教育へのケイパビリティ・アプローチー知識、カリキュラム、教員養成ー』風間書房、183-201。

Leat, D. 1999. *Mysteries Make You Think*. Geographical Association.

## 資格取得者養成の取り組み

～西日本より～

地域特性を生かした創造的なまちづくり・環境づくりの実践に向けて  
ー近畿大学総合社会学部ー

石原 肇（近畿大・専門地域調査士）

これまでの『地域調査とGIS』では、「資格取得者養成の取り組み」が8回取り上げられてきた。いずれの大学も地理学科あるいは地理学コースであった。近畿大学には、地理学科あるいは地理学コースに該当する組織はなく、筆者が所属するのは総合社会学部環境・まちづくり系専攻である。総合社会学部は、2011年に設置された比較的若い学部であり、「地理」の冠の無い学部学科となっているが、環境・まちづくり系専攻の前身であった環境系専攻では、学部設立時よりGIS学術士を取得できるようなカリキュラムとされた。また設立後の最初のカリキュラム改定を行った2015年度から、現在の環境・まちづくり系専攻となり、学部設立時にはまだ学部卒業生を対象とした制度の運用が開始されていなかった地域調査士も取得できるようになっている。

筆者は学部創設10年目を迎えようとしているところであった2020年度に近畿大学に着任したことから、

GIS学術士と地域調査士をカリキュラムに盛り込む作業に直接携わっていない。準備段階から携わられた久隆浩教授によれば、学部創設時の文科省に提出した資料では、「環境系専攻では、統合化された学問を目指す環境学を視野に据え、環境と人間・社会との関係を総合的に眺め、文理融合型の解決アプローチを図れる人材を養成することを目的とする」としている（久、2022）。環境全般をカバーする科目配置が考えられ、リモートセンシングやGISを専門とする先生がおられたことから、その分野も充実させ、GIS学術士の取得ができるように考慮された（久、2019）。

表1は、2022年度入学者向けの履修要項に記載されたGIS学術士取得のために必要な科目である。2021年度に飯塚公藤准教授が着任され、GISの指導が行われている。環境・まちづくり系専攻のGIS関連科目の充実ぶりに驚かされている（飯塚、2022）。

表1 GIS学術士取得のために必要な科目

| 領域         | 科目名       | 備考                  | 単位 |
|------------|-----------|---------------------|----|
| 【A】（1単位以上） | 情報処理      | ー                   | 2  |
| 【B】（2単位以上） | 地理情報システム1 | ー                   | 2  |
| 【C】（2単位以上） | 地理情報システム2 | 組み合わせ               | 2  |
|            | 空間情報処理論   |                     | 2  |
|            | 地理情報システム3 | ー                   | 2  |
| 【D】（4単位以上） | 卒業論文・卒業制作 | ※（社会・マスメディア系専攻）     | 6  |
|            | 卒業論文      | ※（心理系専攻、環境まちづくり系専攻） |    |

※定員の都合上、選別する場合があります。

資料：近畿大学総合社会学部履修要項（2022）より引用

表2 地域調査士取得のために必要な科目

| 大項目              | 小項目              | 科目の細分     | 該当科目名（単位数）   |
|------------------|------------------|-----------|--------------|
| 地域の概念および特性に関する科目 | a. 地域概念を扱う科目     | a1 地理学原論  | 都市・地域計画論3（2） |
|                  |                  | a2 人文地理学  | 都市・地域計画論2（2） |
|                  | b. 日本の地域特性を扱う科目  | b 日本地誌    | 都市・地域計画論1（2） |
|                  |                  | c3 気候学※   | 地球環境論1（2）    |
| 地域調査の技法に関する科目    | c. 地域の自然的特性を扱う科目 |           | 自然地理学2（2）    |
|                  |                  | c4 水文学    | 自然地理学3（2）    |
|                  | d. 統計処理に関する科目    | d 地域統計学※※ | 地域・環境統計学（2）  |
|                  |                  |           | 地域・環境調査論（2）  |
|                  | e. 地図に関する科目      | e2 測量学    | 地理情報システム3（2） |
|                  |                  |           | デジタル処理演習（2）  |

※c3 気候学は、「地球環境論1」「自然地理学2」の2科目とも受講すること。

※※d 地域統計学は、「地域・環境統計学」「地域・環境調査論」「地理情報システム3」の3科目を全て受講すること。

資料：近畿大学総合社会学部履修要項（2022）より引用

最初のカリキュラム改定の際に、科目構成を見直すこととされた（内海他、2022）。その際に地域調査士科目の充実がなされている。表2は、2022年度入学者向けの履修要項に記載された地域調査士取得のために必要な科目である。地理学科ではないため、1つの科目が地域調査士認定科目として認められないこともあり、複数科目の履修が必要となる場合がある。このため、地域調査士取得のためにやや多くの科目を履修する必要が生じている。



彦根市の四番町スクエア周辺  
(2022年11月27日筆者撮影)



長浜市の町家をリノベーションした旅館  
(2022年11月27日筆者撮影)

環境・まちづくり系専攻では、学生が中心となって行う「まちあるき」がある。2020年と2021年はコロナにより開催が見合されてきたが、2022年12月27日に実現の運びとなり、滋賀県の長浜市と彦根市を訪れた。実際にまちを歩くことで、そのまちの表情がよくわかる。地域調査士講習会を受講する学生が毎年数名はいるものの、今のところ資格取得には至っていない。授業やまちあるきを通じて、資格取得の意義を伝えていければと思う。



## 文献

- 久隆 浩 2019「地域を基盤としたまちづくりの支援」『地域調査士通信』、10、pp. 2-3。  
久隆 浩 2022「総合社会学部設置の経緯」『近畿大学総合社会学部紀要』、10周年記念号、pp. 1-9。  
飯塚公藤 2022「ZoomでGISを学ぶ」『地理』、67(12)、pp. 36-39。  
内海秀樹・田中晃代・石原 肇 2022「環境・まちづくり系専攻のカリキュラムの変遷」『近畿大学総合社会学部紀要』、10周年記念号、pp. 41-44。

## 短信

資格取得者からいただいたお便り

私は、大学3年生の時に地域調査士の取得を決めました。就職活動に役立てたいと思ったことがきっかけでした。そして私は今、市役所職員として働いています。市役所の仕事は、各種証明書発行などや税関係の手続きといった窓口業務をはじめ、地震・風水害などの災害対応やインフラの整備、予算の編成や政策の立案など多岐にわたっています。

入庁してから約7年経ちますが、今まで都市整備部局や財政部局など様々な業務に携わってきました。都市整備部局に在籍していたときは、案件に応じて現場の状況を確認し、報告書を作成するということが多くありました。事前に必要書類等を集め、分析しつつ、

武嶋 実咲（市役所職員・地域調査士）

実際に現場に行き確認することで、気付くことができなかった事柄も生じることがあります。日々の業務の中で、地域調査士に求められる素養が活かされていると感じます。

前述したとおり、市役所の仕事は多岐にわたるため、数年に1度の人事異動により、地理的思考が活かされないような部署に行くこともあるかと思いますが、地域にある課題を解決していくことが、地方公務員の仕事であると考えているため、これからも業務を通して地理的思考を深めていきたいです。





# 資格取得者養成の取り組み

～東日本より～

地理学を専門としない学生たちへの  
GIS教育の可能性  
—神奈川大学人間科学部—

小泉 諒（神奈川大）

神奈川大学人間科学部は2006年に設置され、3つのコース（心理発達、スポーツ健康、人間社会）で構成されています。本学部のカリキュラムは、人間社会コースの教員が中心となり、2019年度入学生からGIS学術士に対応しました。人間社会コースは、地理学や社会学、環境学などを専門とする教員で構成され、専門科目もそれらの学問分野を広く扱っています。

本学部の学生の約半数が「地理」の開講が少ない神奈川県内の高校出身であることもあり、入学者の多くは残念ながら高校で「地理」を履修していません。そのこともあり、地理や地図へ興味関心を持つ学生は決して多数とは言えません。また当初は学部内での「GIS（地理情報システム）」という単語の認知も極めて低く、資格取得への参加はその理解を広げる段階から始まりました。しかし社会におけるGIS活用の広がりや、高校における「地理総合」の必修化、学内PC教室へQGISのインストールなど追い風もあり、C科目（GISによる地図作成・空間分析の実習を中心とする科目）に相当する「地理情報システム論」を開設でき、GIS学術士に対応することができました。

前述のとおり、本学部（コース）は地理学を専門とするものではないため、履修者の学修における興味関心はさまざまです。当初は、教員側に地理学を専門とする学生たちとの反応の違いに困惑もあったものの、次第に学生たちがそれぞれ専門的に学習しているテーマに関連した、地理的分析が行われるようになってきました。例えば社会学の専門ゼミナールに所属して高齢化社会の研究を行っている学生は、認定科目の履修を通して高齢化の地域差に視野が広がり、その地図化や福祉施設の近接性に注目するようになりました。また交通に関心のある学生は、自治体から提供されたオンデマンド交通に関する資料を基にベクトルデータを



認定科目の授業風景

作成し、利用圏の人口分析を行うなどしました。さらには、GIS学術士の資格取得者の養成を通し、卒業後の進路として、GIS関係や地図関係の業界を志望する履修者も現れました。

このように、地理学を専門としない学生たちへの「GIS学術士」資格取得養成は、入学当初から地理学に関心を持つ学生が多い環境におけるそれとは、前提条件に違いが存在するといえます。しかしそういった環境であっても、学生たちの持つ興味関心に時間と空間のスケールを与える—ある意味でジオリファレンスする指導を通し、GISの有用性や可能性の理解が広がっている手ごたえを感じています。このような取り組みがGISのさらなる社会貢献につながると信じ、今後も努力していきたいと考えております。（参考：[学生向け資格案内ウェブページ](#)）



## 編集後記

「地域調査士通信」  
「地域調査とGIS」  
バックナンバーはこちら



「地域調査とGIS」第14号をここにお届けいたします。年1回の発行とする中、ひと際充実した情報の発信に努めるべく、全国から情報をお寄せいただきました。これから資格を取得される方にも、既に取得して長い方にも、全8ページのなかの話題が、何かひとつでも皆さまの地域調査やGIS分析の“気づき”に繋がれば幸いです。末筆となりますが、ご寄稿いただいた皆さまをはじめ、多大なるご協力をいただきました皆さまに、心から御礼申し上げます。

編集担当：宇津川喬子（法政大）

表紙の窓：天王スカイタワーから望む  
初秋の男鹿半島  
（2010年9月宇津川撮影）